

ドS御曹司の花嫁候補

Hanako & Toma

楨原まき

Maki Makibara

eternity



エタニティ文庫

目次

ドS御曹司の花嫁候補

5

書き下ろし番外編
媚薬の効果は絶大です

343

トS御曹司の花嫁候補

「なんでっ!？」

たった今届いたメールを見た山田華子は、ぐわっと身を乗り出してノートパソコンに齧り付いた。牛乳瓶の底を切り取って付けたかのような分厚いレンズが、画面にぶつかって擦れるが、そんなことは気にしていられない。

「山田さん、また駄目だったのかい?」

回転椅子に座ったまま勢いよく振り返ると、白衣を羽織った中年男性が背後で眉を下げている。彼の名前は畠山。この研究室の所長だ。

尊敬する教授の下で、大学院に残ってポスドクとして研究ばかりしていたら、知らぬ間に二十七歳になっており、「頼むから就職してくれ」と親に泣かれて困っていた研究馬鹿の華子を採用してくれた、仏様のようなお人である。

ここは大手化粧品メーカー、赤坂堂の本社敷地内の一角にある美容科学研究所。赤坂堂が国内外に販売しているあらゆる化粧品を、原料から研究、開発。その安全性を

確認しているところである。

この美容科学研究所には、畠山所長をはじめ十五人の研究員がいるのだが、華子を除いて全員が男性だ。華子の入社前には女性研究員もいたらしいが、寿退社したり、産休に入ったりした結果、現在のように猛烈な偏りが生じてしまっているのだそうだ。

華子は、赤坂堂の心臓部ともいえるこの美容科学研究所で、美白の有効成分を含んだ化粧水の開発に二年携わってきた。臨床結果も揃い、効果効能もばっちり。保湿を超えた超保水性。今回、厚生労働省から認可が下りたばかりの医薬部外品の新規有効成分、次世代型ハイドロキノン^αが肌の深層部まで染み渡り、シミそばかすといった、もう既にできてしまったお肌の敵を、分解排泄どころか徹底漂白。加齢による肌のくすみも除去してくれるという夢の化粧水の開発——これが華子の初仕事だ。

美の追求者なら老若男女問わず、誰もが欲しがらでであろう代物を作り上げたのだが、商品開発部から、それを認めないという連絡がメールできた。そもそも、作れと指示を出してきたのは商品開発部のほうなのに。

保湿力があって、美白効果があって、浸透力が高くて、いい匂いで、付け心地もよくて、安全性も高くて、ぶっちゃけ他社に負けない化粧水。理想を詰め込みすぎで、無茶としか言いようのない代物だったか、それが上からの指示で成果を期待されていると思っただからこそ、華子はコツコツ地道に研究してきたのだ。なのによりやく出来上がっ

たら、今度はやつぱりいらなときたものだから納得いかない。納得いかなすぎて、プレゼン資料を作り直して再提出したくらいだ。だがそれも、こうして突き返されてしまつたわけだが。

「信じられません。この化粧水を商品化しないなんて。次世代型ハイドロキノンαちゃん最高なんですよ!? そのよさがわからないなんて、商品開発部には馬と鹿しかいないのでしょうか? 至急、動物園に引き取っていただきたいものです」

華子が真顔で毒を——いや、真つ当な主張をしていると、首元が伸びきつたTシャツに穴のあいたジーンズを身につけた男性が、インスタントコーヒーの入ったビーカーにお湯を注ぎながら、畠山所長の後ろから顔を出した。櫛を入れていないボサボサの頭で、とても勤務中には見えない格好をしているが、彼は華子の同僚の阿久津で、れっきとした美容科学研究所の研究員である。

「こうなると、あの噂は本当なのかもしれませんなあ」

「噂、ですか?」

華子が続きを促すと、阿久津はその独特な話し方を更に早口にした。

「小生が聞いたところによりますと、経営サイドが委託に乗り気らしいのですよ。既に、いくつかのメーカーとコンタクトを取っているとかいいたいか」

「え? 委託するのですか!？」

華子は思わず椅子から腰を浮かせた。

百貨店に並ぶ有名メーカーの商品とやたらとそっくりな——そう、成分までもそっくりな後発化粧品が、ドラッグストアやコンビニに安価で並んでいることがある。なんのことはない。研究から開発製造まで請け負った委託先が、パッケージを変えただけのそっくり同じものを作っているのだ。もちろん、そういう契約をはじめから交わしているのだから違法ではない。発注側は、諸々を委託に丸投げすることによって、開発費も製造コストも抑えられるというメリットがあるから、最近はそのような商品が増えているのだ。だが、そんなことをされたら、今ある研究所はどうなる? 縮小され、華子達研究員はリストラ対象になる可能性も出てくることに——

「そんな……。わたしは納得しかねます」

華子が露骨に肩を落とすと、阿久津はずすずつと音を立ててビーカーのコーヒーを吸った。そんな彼の横で、所長が顎をさすりながら難しい顔をしている。

「まあ、僕のところは正式な話としては来ていないが、そういう噂はあるにはあるようだねえ」

「これも時代の流れでありましょうな。ま、小生は研究ができればどこでもいいであります。また大学に戻る手もありますし、転職も。そうそう、海外の選択肢もありますな」
「それはそうですね……」

知は力だ。研究一本で実績を積み上げてきた研究員は、それこそ職人のようなもの。国内で転職が叶わなくても、海外へ行けば引く手あまただ。それに海外のほうが待遇がよかったりするんで、語学力にそれなりに自信があれば、阿久津のように海外勤務を視野に入れる人間もいるだろう。

「でもそれでは、次世代型ハイドロキノンaちゃんはなかったことになるじゃありませんか！」

「まあ、それは仕方ないであります。新しいものを作っても世に出ないことなんて、商業ではザラにありますですよ。山田女史も洗礼を受けたと思って。ねえ、所長？」

阿久津は所長に同意を求めよう目配せする。

「そうだねえ……こればかりはねえ……。利益が上がるかどうかを判断するのは上であつて僕らじゃないからねえ。従うのみだねえ」

「……………」

瓶底丸眼鏡が自分の表情をわかりにくくしていることを知りながら、華子はムムツと眉を寄せた。なにが洗礼だ。

所長も阿久津も、最初から諦めている。彼らも過去に散々辛酸を嘗めてきたということなのだろう。その経験が、彼らを牙の抜かれた獣のように従順にさせているのか。言わんとしていることはわかるのだが、散々苦労してやり遂げた自分の初仕事で、日の

目を見ぬまま葬り去られるのはやはり納得できない。だって自信作なのだ。効果も効能も間違いないくある。売り出せば、喜ぶ人がきつとたくさんいる。

しかし、赤坂堂が製品化してくれないなら、よそで——というわけにはいかない。華子が仮に転職したとしても、転職先でこの化粧水と同じものを勝手に作るなんてことはできないのだ。就業規則で「特許を受ける権利」は会社に帰属することになっている。つまり、華子が開発した有効成分は赤坂堂のものであつて、華子のものではないのだ。

「山田さん、まあ、そう気を落とさずに。委託の話だつて噂だ。ただの噂。山田さんの作った有効成分も、今後別の形で使うこともあるかもしれないじゃないか。まったくの無駄じゃないよ」

確かに所長が言うように、クリームだったり乳液だったり、フェイスマスクだったり、形を変えて別の商品として出せるかもしれない。だがそれは、研究所が存続していればの話だ。製造だけでなく、開発さえも委託することになって研究所がなくなつてしまつたら？ もうそこで終わりなのだ。

（でも、委託の話がまだ本決まりでないのなら……説得の余地はあるかもしれません）華子は唇を引き結ぶと、先ほど不愉快なメールを受信してくれたノートパソコンに向き直つた。

「もう一度、次世代型ハイドロキノンaちゃんのプレゼン資料を書き直してみます。わ

たしの書き方が悪かったのかもしれませんが」

「そう言いながら、前のめりになって怒涛の勢いでキーボードを叩く。

「まあ……あまり根を詰めないようにね」

「はい！」

一瞬だけ所長を振り返り、またパソコンに向かう。今めいっばい足掻かなくては、後悔する気がするから。

結局華子は、その日のうちにプレゼン資料を商品開発部に再再提出した。前回より詳しく作ったプレゼン資料は気合いが入りすぎて、五十ページを超えてしまったくらいだ。商品開発部の担当者に分厚い資料を叩きつけながら、自らの知力の結晶である次世代型ハイドロキノンaの効果効能をおおいに語ってきた。相手は引き撃った顔をしていたようだが、まあ大丈夫だろう。華子の熱意と、次世代型ハイドロキノンaの素晴らしさが、今度こそ伝わったと信じた。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

「お疲れ様」

十八時の定時になって席を立つ。すると、顕微鏡を覗いていた所長がわざわざ顔を上げた。

「山田さん、来週からはこっちの実験データを取るのを手伝ってくれないかな」

「……はい。かしこまりました。………では」

所長の言葉に素直に頷く。「落ちた企画にいつまでもしがみつくな」と言われているようで——いや、実際遠回しにそう言われているのだろう——かなり切ない。それでも所長は、研究馬鹿の華子の気が紛れるように配慮してくれているのだと思う。

（はあ……世の中敵しいですねえ。ああ、可哀想な次世代型ハイドロキノンaちゃん……なんとかしたい。わたしが尊敬する教授なら、次世代型ハイドロキノンaちゃんの素晴らしさを一瞬で理解してくださるに違いないのに！）

華子は胸の内でのため息をついて、自分ひとりしか使う者のいない女性更衣室に入った。ロッカーからA4サイズのトートバッグを出して、中のスマートフォンをチェックする。どうやらメッセアプリの通知が来ているようだ。

（お母さんからだ。なんででしょう？）

あまり頻繁に連絡を超越すタイプではない母親である。急用だろうか、急いでメッセアプリを開いた。

『お誕生日おめでとう』

短いメッセージを見て、一瞬きょとんとしてしまふ。が、更衣室のカレンダーの日付を見て、そうかと合点がいった。

四月三十日——今日は、華子の二十九歳の誕生日である。

(あら)。すっかり忘れていました)

家族以外に祝ってくれる人もなし、前の誕生日からいつの間にか一年が経っていたという区切り以上の感慨かんがいもない日であるが、祝われればそれなりに嬉しい気持ちにはなる。白衣とスプリングコートを取り替えてロッカーに鍵を掛けた華子は、更衣室から出ながらスマートフォンでメッセージを入力した。

「『ありがとうございます』って——」

メッセージを送って、スマートフォンをジーンズのお尻ポケットに無造作むぞうさくに押し込む。と、そのとき、ポケットの中でスマートフォンが震えた。母親からの電話だ。華子は、研究所の玄関に向かって歩きながら電話に出た。

「もしもし、ハナ？ お仕事は終わったの？」

「はいです。ちょうど今から帰るところです」

おっとりとした声に頷うなずきながら答える。母親は「お疲れ様」と付け加えてくれた。

「じゃあ、改めて。お誕生日おめでとうございます。もう二十九歳ね」

「ありがとうございますです。実はすっかり忘れてまして。えへへ……」

自分でも驚いてしまう。実感なんてまるでないのだから怖い。華子の精神年齢なんて、大学生の頃から変わっちゃいないのだ。すると、電話の向こうから小さなため息が聞こえた気がした。

「ねえ、ハナ。いつまでお仕事するの？」

「そうですねえ、今の社会しゃかい保障制度ほしょうせいどを思うに、定年後もしくはらくは働いたほうがいいのか——

自分の考えをそのまま述べると、また電話の向こうから小さなため息が聞こえる。二回目なので、気のせいということはなさそうだ。

「お母さんの言い方が悪かったわ。今のは、もう二十九歳になってしまったけれど、そろそろ結婚も考えないとあとがけないわよ。ギリギリよ！ ピンチよ！ 誰かいい人はいないの!? という意味よ」

「ああ、結婚適齢期の女性がしばし体験するという、親族からの結婚の催促さいそくというやつですね」

他社の化粧品研究のために購読している女性誌にときたま書いてあるので、あらゆる面に疎い華子も言い直されればすぐにわかった。

「残念ながら、そのような殿方とのかたはいないのが現状です、はい」

「ああもう……この子は……はあ……」

三度目になる母親のため息に、ちよつと申し訳なくなる。華子は昔から、お勉強の成績はすこぶるいいのだが、大学で高分子化学こうぶんしかがくを専攻せんこうしてからというもの、研究にのめり

込んで他のことにリソースを割くことを、「豆粒米粒どころかミジンコ大ほどもしてこなかったのだ。高分子化学の知識は、現在手がけている化粧品原料開発に役立つているわけだけれど……」

「お仕事もいいけど、そろそろ将来のことも本気で考えてちょうだい。お母さん、心配よ。お母さん達がいなくなっても、あなたがずっとひとりなんじゃないかって……。言いたくないけど、あなたたつてば抜けてるし、頼りないし、友達すらいらないじゃない。多少強引かもしれないけど、結婚でもしなきゃずっとひとりよ?」

「うっ……」

痛いところを突かれて言葉に詰まる。研究馬鹿の華子には、同性の友達というのがまづいない。もちろん、異性もだ。学生時代の同級生や、先輩後輩といった知り合いはたくさんいるが、あくまで知り合いだ。まったく親しくない。学会で会ったときに、論文の検討や、研究の進み具合などの話はしても、プライベートとなると皆無である。

誕生日に——しかも花金の就業後になんの予定もない。帰って食べて寝るだけ。おまけに誕生日を祝ってくれるのも親しくないといくれば、これまでの人付き合いがいかにも間違っていたかを実感させられる。そんな娘は、親から見れば絶えずやきもきさせられて、頼りない存在なのだろう。

「お母さんはね、ハナをひとりしておくのが心配なの。だってあなた、研究に夢中になると、ご飯を食べるのも忘れちゃうじゃない。それで倒れるんだから! そんなんじゃ駄目よ。頼れる人が側にいたら、そういうこともなくなるでしょ」

実は華子には、研究に夢中になると、食べることも忘れてしまうという悪癖がある。酷いときには、自分で作った料理の存在を忘れて、論文や粧業界のメルマガ、ニュースサイトを読みふけり、そのまま食わずに放置して腐らせ、挙げ句の果てには倒れるのだ。集中を通り越して夢中になると、周りの声も耳に入らなくなる。食事の時間というのは非常に無駄が多く感じられて、華子は職場の机の引き出しにブドウ糖入りゼリー飲料を箱でストックしており、食べるのが面倒くさいときはそれを飲んでいくくらいである。そんな食生活が身体にいいわけないことも、華子自身、一応はわかっているわけ。

「た、確かに……。体調管理してもらえると非常に助かりますね」

華子が同意したことに気をよくしたのか、母親の声のトーンが明るくなった。

「ね? それにあなたは頭もいいし、なによりすごく可愛いんだから! 本気で探せば、お相手なんかあつという間に見つかるわ」

「ええ? それはちょっとというか、だいたい言いきぎでは?」

「そんなことあるもんですか。ハナは自慢の娘よ。……ちょっと変わってるけど」

「最後のそれは、本当に言わなくちゃいけないことだったんでしょ? か、マイ・マザー?」

と喉まで出掛かって、ぐっと呑み込む。自分が変わっているという自覚はあるのだ、一応。「じゃあ、考えてみてね。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」
電話を切った華子は、ちょうどとまっていたエレベーターに乗って一階のボタンを押した。

振り返れば、ずっと研究ばかりしてきた。大学で専攻した高分子化学は、化学や繊維、医療や電子産業、果ては航空宇宙分野まで、幅広い領域で活かされる技術だ。高分子が人類の発展に必要な資材となった今、研究に終わりなどない。

華子の母親はおっとりとした専業主婦で、父親は開業医。こちらも温和な人で、華子が高分子化学に傾倒することに理解もある。そんな両親を、研究に没頭するあまり『頼むからちゃんと就職してくれ』と泣かせたのは華子だ。ポストクの給料は年々右肩下がりに。いつまで経っても大学から離れず、ポストクになったと思つたら、薄給の上に家のことはなにもしないパラサイト娘。いくら理解ある親でも泣きたくなるのは当然だ。

華子は大学院を出て、赤坂堂の美容科学研究所に就職すると同時に独り暮らしをはじめたものの、結局、研究三昧の日々に戻っている。まあ、ポストク時代に比べると、給料はすこぶるいいのだが。今度は『いい加減にちゃんと結婚してくれ』と親を泣かせてしまうのも時間の問題だろう。さすがにそれは不本意だ。

（結婚……うーん……結婚、か……）

まったく考えたこともなかったので、正直唸ることしかできない。だが、母親の言う通り、結婚でもしなければ一生ひとりなのは間違いないだろう。自分の性格上、ずっとひとりでいることに抵抗はないし、親が泣くのを除いて別に困りもしない。じゃあ、結婚しない主義かというところまでのこだわりはない。結局華子は、研究ができればそれでもいいのだ。

つまり、研究を続けても文句を言わない人が相手なら、結婚するのもやぶさかではないわけで。むしろ、研究以外の私生活の部分を支えてもらえたら——
（そう考えると、結婚はあり寄りのありますね。いいかもしれない。でも、男の人の知り合いはいるにはいますが全然親しくありませんし……。日常的に会う男の人って、職場にしかないんですよねえ）

つい先ほどまで一緒にいた所長をはじめとする、研究所の面々を思い浮かべてみる。

所長は既婚者なので対象外。他にも何人か既婚者がいた気もするが、今まで一度もそういう対象として見たことがなかったので確かなことはわからない。彼女持ちかすらも不明な有様なのだ。

相手の容姿や仕事、年収は気にしないから、フリーで、年はそう華子と変わらなくて、華子の仕事に理解があり、理系の話がそれなりに通じて、家事もひと通りこなしてくれ

る男の人がいい。

(男の人、男の人、誰か男の人——)

男のことばかり考えていると、エレベーター内に設置された大きな姿見がふと視界に入った。そこに映る自分を見て、なんとも言えない気持ちになる。

(それにしてもお母さん……わたしを可愛いつていうのはちよつと……)

コートの下は、白のTシャツにジーンズ。黒髪ストレートのひつつめに、顔には大きな瓶底丸眼鏡。おまけにすっぱい。持ち物は生成りのしょぼいトートバッグだ。女らしさなんかまるでない。正直なところ、ピーカーでコーヒーを飲んでいた研究員の阿久津とそう変わりない格好をしている。これを可愛いというのは、親の鼻屑目というものだ。清潔であれば見栄えなどどうでもいいという人間が、美容研究をしている様はなんと

も言えない滑稽さがあるのかもしれないが、それはそれ。これはこれである。

華子が男性同僚達をそう、いう対象として見たことがないのと同様に、実験一筋できた男性同僚達の理系脳味噌が、毎日毎日同じ格好で出勤してくる華子をそう、いう対象として認識するはずもなく。華子は研究所の紅一点でありながらも、チャホヤどころか、女扱いされることもなく日々を過ごしてきたわけだ。それが気楽でもあったわけだが――

(職場で結婚のお相手を探すのは効率が悪い気がしますね)

既に華子に対象外のラベリングをしているであろう相手の意識を変えるのは、非常に

困難だ。それに、男性同僚ひとりひとりに、「わたしは結婚しても研究を続けたいのですが、あなたの結婚対象になりますか?」とか「わたしの私生活も含めて支えてくれますか?」なんて聞いて回ったら、確実にヤバイ奴認定されてしまう。今後の仕事にも悪影響を及ぼしかねない。

もつと効率的に相手を見つけることができれば――

(そう言えば駅前に、結婚相談所がありましたね。えーっと、なんとかコネクト!)

毎日利用する最寄り駅のビルに、結婚相談所の大きな看板があったこと思い出す。

煽り文句は「最先端AIマッチングシステムが、あなたを想い、助け、寄り添ってくれるベストパートナーをご紹介します」。

AIシステムは最近、至るところに導入されて、成果を上げていると聞く。なにより最先端なのがいい。好奇心がそえられる。

第一に、恋人いない歴〇年齢の自分が、自力で結婚相手を探すなんてできるはずがない。そんなことができるなら、この二十九年の中でもう運命の出会いくらいとつくに果たしているはずだ。自力で出会える範囲などたかが知れているのだから、最新の科学の力に頼ったほうがいい出会いができるかもしれないではないか。

そもそも華子は、人を好きになつたことがない。恋なんて、脳内麻薬のドーパミンがドバドバと馬鹿みたいに出て、セロトニンによる制御が効かなくなつた一種の錯乱状態

に過ぎない。人はその状態に、愛だの恋だのと詩的な名前をつけているのだ。つまり、「恋は盲目」や、「あばたもえくぼ」も全部脳内麻薬のせい。自分が錯乱状態になるなんて、ちよつと耐えられない！ 華子がしたいのは、恋愛ではなく、結婚なのだ。
 (うん！ 手っ取り早く結婚相談所に相談することにしましょう！ 我ながらナイスです！)

華子はスマートフォンを取り出すと、記憶に残っていた煽り文句を頼りに、その結婚相談所を検索した。見つけたぞ。フタリエコネット。

どうやら、平日の今日は二十時まで開いているらしい。

(早速登録しに行きましょう！)

一階に着いてエレベーターを降りた華子は、思い立ったが吉日とばかりにフタリエコネットの店舗に向かった。



カチカチッ。快適な温度に設定された部屋に、マウスをダブルクリックする音が小さく響く。ノートパソコンの画面に表示されたグラフを見ながら、赤坂透真は口の端をニヤリと上げた。

(お。予想通り売り上げが上がってきたな。やっぱりサンプル配布プロモーションは、無料より有料に限る。対して、オフィス街で配ったサンプルのほうは、ほぼ購入に結びついてない。あー、もうこれからやめるように言おう。これならドラッグストアで配ったほうが、三倍はリターンがあるわ)

新規の顧客一人あたりを獲得するコストをプログラムに計算させながら、顧客の購入実態を探っていく。特に売り上げのいい商品とプロモーションをマークして、透真は顎を軽くさすった。

ここは大手化粧品メーカー、赤坂堂の本社ビルの一室だ。洗練されたデザイナーのワークデスクと応接セット、そして歴代社長の出版物が並ぶ本棚の横には、美はつくれるという社訓が額に入れて掲げられている。ひとりには広いこの部屋を、透真は使うことを許されていた。

透真は、赤坂堂の十五代目社長の息子だ。今はまだ執行役員だが、チーフ・ストラテジー・オフィサーいわゆるCSOとして、市場への商品供給計画や物流、品質の改革から戦略立案に関わっている。将来的にはもちろん、社長の座に君臨することが約束されている——と言いたい、そこは株式会社。総会で一定の支持がなければ、いかに直系とはいえ会社のトップに立つことはできない。そのために誰にも有無を言わせぬ結果を残すべく、戦略を練る日々だ。

他の業界と比べて化粧品業界は、メーカーごとの好不調はあっても、バブル崩壊後も安定した伸び率を誇ってきた。要因は多々あるが、第一に、化粧品自体が経済の影響を受けにくいということが言えるだろう。多くの女性にとって、化粧品は必需品だ。不景気になれば女性が働きに出るから化粧品を使う機会が増え、その結果、低価格化粧品が売れる。いわゆる、プチプラコスメだ。収入が減った女性が商品ランクを落とすことはあっても、化粧品をまったく使わなくなることはない。反対に好景気になれば女性の収入が増え、今度は高級化粧品が売れるようになる。自分の髪や肌にかける金額が増えるのだ。

女性が美を追求する以上、そのサイクルが崩れることはない。価格や販売方法、プロモーションといったユーザーに対するアプローチは、数字になって返ってくる。数字が上がらないということは、他社との客の取り合いに負けたということだ。

(この俺が絶対に業界トップを取ってやる)

人体の運動理論に基づいて設計された高機能ワークチェアに身体を預けた透真は、伸びをするようにリクライニングした。くるっと椅子を半回転させ窓の外を見つめる。もう五月も終わりにさしかかり、会社の敷地内にある木々の新緑が清々しい。未来を感じさせる力強さがある。これから夏にかけて、化粧品の販売合戦は熾烈を極めることになる。透真は仕事が好きだ。

赤坂堂は現在、化粧品業界で国内シェアナンバー2の座に甘んじている。これを国内シェアナンバー1にすることが透真の夢だ。そしてゆくゆくは、海外へ販路を広げたい。化粧品のメインは、メイクアップと基礎化粧品だ。メイクアップに関しては、ファンデーションはA社、口紅はB社というふうに、複数のブランドを使ったり、季節によって使用するものを変えたりする女性が多い。特に今は、あらゆる年齢層でプチプラコスメの利用率がアップしている。

その一方で、化粧水や乳液といった基礎化粧品は、長年同じブランドを使い続けるケースがほとんどだ。ブランドチェンジが起こりにくいということは、一度気に入ってもらえれば継続購入が見込めるが、逆に言えば、他メーカーからシェアを奪うのは簡単ではないということでもある。

しかし売り上げで美味しいのは、基礎化粧品のほうなのだ。基礎化粧品の購入合計金額は、メイクアップ用品の二倍になるという現実がある。

つまり基礎化粧品のシェアを拡大することが、赤坂堂が業界ナンバー1になる近道であることはまず間違いない。

「——足りないんだよなあ……なにかこう、決め手になるやつが欲しい。ガツンと女心を掴むやつ」

他メーカーからシェアを奪う決め手。起爆剤となり得るもの……

あらゆる女性に「欲しい！」と思わせる商品が、今の赤坂堂には必要なのだ。

透真が頭を悩ませていると、突然ドアがコンコンとノックされた。

腕時計に視線を走らせれば、もう定時の十八時を過ぎたところだ。赤坂堂では残業を推奨していないし、今日は誰かと会う予定もない。緊急案件なら内線が先にかかってくるはずなのに。

「どうぞ」

声をかけるのとほぼ同時に開いたドアに目をやると、入ってきたのは赤坂堂の現社長。透真の父親でもある敬之だ。白髪のままじつ髪をオールバックにした敬之は、化粧品メーカーの社長らしく清潔感にあふれている。顔立ちも整っているが、六十五歳の割には肌艶もいい。腹も出ていなければ加齢臭など微塵もない。香るのは自社製品のフレグランスだ。フルオーダーのブランドスーツは似合いすぎて嫌味もない。さしずめ歩くダンディズムと言ったところか。

「社長。どうされたんですか？」

椅子から立ち上がりつつ敬語で尋ねる。いくら親子といえどもここは会社。甘えた態度は許されない。が、敬之は直立する透真を右手でまあまあと制した。

「就業時間は過ぎた。親として、ちよつとおまえに話があつてな。なに、手間は取らせない」父親の左手にある紙袋にチラリと目をやる。なにが入っているのかはわからないが、

それにまつわる用件なのだろう。透真は既に実家を出てひとり暮らしをしているし、敬之も忙しい身の上だ。プライベートで会おうとすると、お互いに都合をつけるという仰々しいものになってしまう。すぐに終わる用件なら、こうして就業時間後すぐに直接訪ねるほうが早いのだ。

促されるまま椅子に座りなおすと、敬之は持っていた紙袋を机の上にドサツと置いた。「透真。今、お付き合いをしているお嬢さんはいるのか？」

いきなりだと思つた。

「いや、そういう人はいないよ。今のところはね」

軽く答えながら、肩を竦める。「付き合っている人はいるか」と聞かれた時点で、透真の勘が父親の用件を察知した。

「なに。結婚しろって？」

「話が早い」

そう言った父親は、紙袋の中からいかにもお見合い写真ですといった高級台紙を出して、透真に差し出してきた。

「おまえももう三十二だ。要領よくやっているようだが、そろそろ身を固める時期かと思つてな。私が母さんと結婚したのも三十二だった」

差し出されたお見合い写真を受け取り、父親に向けた視線を、今度はさっきの紙袋に

やる。まだ中に何部もの写真台紙が入っているようだ。「私が見繕ったおまえの花嫁候補の写真だ。中に鈞書も挟んである。みんなおまえ好みの美人だぞ」

(どうせ画像を加工してんだろ?)

と、内心毒づきながら、お見合い写真をべろっと開いてみる。

加工疑惑はさておいて、確かに美人だ。緑の木々が見える窓を背景に、袖がフリルになったワンピースを着た女性が、脚をクロスして写っている。モデル顔負けのポーズは「どう? 私、綺麗でしょ?」という自信のあらわれに見えた。

「ガキじゃないんだ。花嫁候補だなんて、こんなお膳立てしてもらわなかった方がいいだけだな」

たった今開いたばかりのお見合い写真を閉じて、透真は小さく息を吐いた。

自分で言うのもなんだが、透真はモテる。父親譲りのこの整った顔立ちが女性に好かれるという自覚はあるし、加えて自分が赤坂堂の社長の息子であることも別段隠さないから、特定の相手は作らなくても女性に困ったことがないのだ。

「もちろん。無理にこの中から選べとは言わんさ。おまえが、この赤坂堂に恥ずかしくない花嫁を連れてきていければな。そうすれば、私がこんなお膳立てをしてやる必要もなかったのだがね?」

そう言った父親が、鼻で笑っている。それは、一夜の恋ばかりを繰り返す透真の日常を見透かしているようだ。

「あー、はい。わかった。あとで見とくよ」

自分の分が悪いことを感じて、早々に白旗を上げる。すると敬之が、バシッと左右から力強く肩を叩いてきた。

「会社のことをおまえが真剣に考えてくれているのはわかっている。同じくらい真剣に自分のことも考えろ。私からはそれだけだ」

「……………」

返す言葉が思いつかず、ダンディな後ろ姿が部屋を出ていくのを黙って見送る。

パタンとドアが閉まって、透真は小さく息を吐いた。椅子に身体を預け、天井を仰ぐ。(結婚……結婚ねえ……)

男としては、不自由で窮屈なイメージがある。自分の自由がなくなると言えばいいか。とは言っても、透真は結婚否定主義者ではないし、「俺は絶対結婚しない!」なんて言い張るつもりもない。いつかは結婚するときに来るんだろう。だが、その不自由で窮屈な檻の中に、自分が喜んで入っていく様がいまいち想像できないだけだ。その一方で、父親の言わんとすることもわかる。

役職が上げれば、公式のパーティーなどに同伴するパートナー——つまり伴侶は必

要不可欠だ。特に海外ではその風潮が顕著と言える。赤坂堂がこれから、海外にシェアを拡大していこうとするなら、海外の裕福層、投資家主宰のパーティーに出る機会も増えてくるだろう。後継者のことも考えなければいけない。だがそんなことを脇に置いたとしても、我が子によい伴侶と幸せな家庭をと願う親心が自分の父親にあることも理解できる。

（俺ももう三十二だ。そろそろ腹を括れ、つてことか……）

父親から渡されたお見合い写真を、さつきとは違う気持ちで開く。

透真は写真ではなく、台紙に挟まれていた釣書に目をやった。

——西園寺優里亜。父親はコンビニ事業や総合スーパー事業を営む大手流通株式会社スリーセブンの代表取締役。三姉妹の末っ子。

三年前、スリーセブンと赤坂堂は事業提携を行った仲だ。赤坂堂が二十代前半の女性をターゲットに立ち上げたメイクブランドを、スリーセブンだけで販売するという独占契約で、そこそこまとまった利益を出している。西園寺優里亜が候補に挙がったのも彼女の父親がスリーセブンの代表取締役だからだろう。ビジネス的な政略結婚が狙いなのはわかる。

（ああ。そう言えば、スリーセブンと業務提携したときのパーティーにいたな。そのときは大学生だったっけ……。ふうん）

なんとなく思い出しながら、釣書の続きを読んだ。

——現在は二十四歳。〇女子大学人間総合学部卒。趣味、スキー、テニス、ピアノ、バイオリン、旅行。特技、英会話。

「は？」

思わず声が出た。西園寺優里亜の釣書を頭からもう一度丁寧に読み直す。

（なんで職歴が書いてないんだ？ もしかして職歴がないのか？ 働いたことがないのか？ そうなのか？ 今まで一度も？）

そうとしか考えられない。透真はボタンと閉じた西園寺優里亜の写真と釣書を机に置いて、紙袋から別のお見合い写真を出した。そして、挟まれていた釣書に目を通す。

（ちよつと待て、こいつもか！ 嘘だろ？）

開いて、閉じて、開いて、閉じて——そうして全てのお見合い写真と釣書をチェックした透真は、最後の写真を机に放り出して思わず叫んだ。

「こいつら全員ニートじゃねーか！」

ここにリストアップされた女性達は、生まれついてのお嬢様だ。父親が大手企業の代表取締役だったり、銀行の総裁だったり、テレビ局の重役だったり。あくせく働く必要がないのだからといって全員が全員、親の膺鬻りとは何事だ。美人なのは確かだが、言い換えると顔と親の肩書き以外にないじゃないか。

このお見合い写真の中から相手を選んで結婚すれば、赤坂堂にはなにがしかのメリツトがある。しかし、透真個人にはデメリツトしかないことは明らかだ。働きもせず、親の金で旅行だスキーだと好き勝手に遊び回ってきた女が、結婚した途端に良妻賢母になれるわけがない。金の出所が親から透真に変わるだけ。透真はATM兼アクセサリーだ。「俺は働いている美人が好きなんだ！美人でもニートはいやだっつーの！俺をナニと結婚させようってんだよ、親父！」

冗談じゃない！今どき一度も働いたことのないニートが自分の伴侶だなんて！本気で無理だ。仕事大好き人間の自分と、話どころか価値観さえも合うとは思えない。我が子に幸せな結婚をとという親心はどこにいったのだ、親父よ。

ドン引きした透真が顔を引き曇らせていると、ポロンとスマートフォンが鳴った。

(メール、か)

スマートフォンに届くメールは全てプライベートのものである。業務用はパソコンで受信するようにしている。しかし今、プライベートで急いで確認しなくてはならないようなメールが来る予定はなかった。だが、この漣立った心中を落ち着けるために少し別のことを考えようと、透真は広げたお見合い写真の山から、自分のスマートフォンを発掘した。「ん？なんだこれ？」

『あなたにピツタリなお相手が見つかりました』

そんなメールの件名を見て、スマートフォン片手に首を傾げる。

一瞬、新手のスパムかとも思ったのだが、透真は自分が受信許可したメールしか受信箱に入らない設定にしている。知らないアドレスから来たメールは、即迷惑メールフォルダ行きなのだ。だからこのメールは、透真が自分自身で受信を許可したアドレスから来たことになる。

送信元を確認しようと、透真は件名をタップしてメールを開いた。

『赤坂様。日頃より、結婚相談所のフタリエコネットをご愛顧いただき誠にありがとうございます』

「結婚相談所？結婚相談って、ああ！あれか！」

メールの冒頭を見た途端、すっかり忘れていた記憶が蘇る。

実は、透真の大学時代の同期が、数年前に事業を立ち上げたのだ。それがこの結婚相談所、フタリエコネット。大学時代に学んだ統計学を活かして、独自のマッチングシステムを構築。最新のAIが登録会員の中からベストパートナーを紹介してくれるというものらしい。名前は、ふたりと、結びつけるという意味のコネクトを掛け合わせた造語なのか。

当時、事業を立ち上げたばかりだった同期と飲みに行ったときに、「会員数を少しでも増やしたいから協力してくれないか」と頼まれて、透真も登録していたのだった。

（もう何年前になるか？ ノリで登録したからすっかり忘れてたぜ）
 忘却の彼方へと追いやっていたこの結婚相談所の名前を、透真はネットで軽く検索してみた。レビューをいくつか読んだが、なかなか評判がいいらしい。実店舗も少しずつ増えていて、今はスマートフォン用の専用アプリもあるとのこと。

（ふーん。やるねえ）

会員登録は実店舗のみで行い、独自の審査をクリアしなければ登録できない仕組みになっている。しかも、本人確認書類をはじめ、独身証明書やら卒業証明書、国家資格以上は資格証明書、おまけに収入や勤務先を証明するために、源泉徴収票や確定申告の控えも提出させられる。

提出書類が多ければ多いほど、結婚相談所としての信頼が増すのかどうかは不明だが、それらの書類は、会員登録している限り毎年更新する必要があるんだとか。

ただ、透真自身は更新手続きをしていないのだが――

『俺の年収なんて、毎年そんなに変わらないしな。て言うか、本当の額を書いたら、俺にマッチングする女が増えないか？ 嵩増し登録なのにそれじゃあ本末転倒だろ。逆サバしとこう。仕事も普通の会社員にしてと。履歴書？ 俺が同じ大学出てるの、おまえが知ってるじゃないか。独身証明書もパスパス。え？ A Iが顔面偏差値採点するから写真は絶対必要？ しょうがないなあ、んじゃ今スマホで撮れよ。写真館とかいいよ。』

俺イケメンだからスナップで。なに？ 他にも感覚テストとかあるのか？ それを受けたら、俺がどんなタイプの美人が好きとかもわかるわけ？ へえ、心理テストみたいなやつか。それは面白そうだな。今スマホでできるのか？ んじゃ受けるよ。更新手続きをそっちでしてくれといったら、俺が結婚するまで会員登録していいぞ』

なーんて、同期と飲みながらノリで言った気がする。マッチングしてもらおう気なんかさらさらなかったから、写真なんか変顔で登録したっけ。同期は会員登録数が増えた今も、透真の言葉通りに毎年更新していたようだ。なんとも涙ぐましい営業努力である。

（ああ、だんだん思い出してきた。酒の勢いって怖えーな）

若気の至りに自分で失笑しながら、透真はマッチングメールをスクロールした。本文中に記載されていたURLから、会員専用ページにログインする。表示されたページには、A Iがマッチングしてくれた「赤坂透真様にピッタリなお相手」のプロフィールが表示されていた。

（H・Yさん？ この人が俺にピッタリな相手ねえ？ ふーん、二十九歳か。身長一五八センチ。体重四二キロ。会社員。あ、職業のカテゴリが研究者だ。女の実研究者か！ リケジョだな、リケジョ。年収、五百万。へえうちの研究者と同じくらいか。分野はなんだろう？ 結構大手に勤めてそうだな。勤続二年……ああ、大学院を出てるのか。趣味、研究だつて。はは！ 仕事が趣味なタイプか？ 顔は見れないのか？（顔）

イニシャルの横に、青背景にバストアップの証明写真風の画像が表示されるが、顔の中央がうつすらとぼかしてある。髪型や髪色、体型などの雰囲気はなんとなくわかるものの、それ以上に鮮明な写真を見ることはできない。なるほど、名前や勤め先、顔写真などの個人が特定できる要素には、フィルターがかかる安全仕様らしい。ここで相手のだいたいのプロフィールを確認して、お互いに興味を持った次のステップに進むわけ。

父親が持ってきた見合い写真と鈎書つがきよりも、明らかに熟読している自分に気が付いて、透真は取り繕つくろうように軽く咳せき払いした。この部屋には自分しかないのに。

ページの最下部にある、「H・Yさんに会ってみたいですか？」という問いを視界の端に入れたら、このAIマッチングシステムの解説ページに飛んだ。

（まあ一応、どんなシステムか把握はあくしときたいしな……俺とこの人がどういう基準でマッチングしたのか、とかさ）

自分で自分に言い訳しながら、ページを熟読する。

店舗で新規会員登録が完了すると、翌日からAIがマッチングを開始。希望の条件を合致がちさせるだけでなく、ふたりの共通点などもマッチングポイントになるらしい。それは趣味だったり、思考だったり、食の好みだったりといういろだ。他にも、お互いをうまく補完し合えるような組み合わせになることもあるんだとか。

マッチングすると、まず既会員にマッチングメールが届く。透真が受け取ったあの『あなたにピッタリなお相手が見つかりました』というメールだ。

既会員が先に大まかなプロフィールを閲覧えつらん。会ってみるかどうかの問いに、『はい』を選択すると、新会員にマッチングメールが届く。ちなみに、どちらかが会わない——『いえ』を選択すると、AIが瞬時に好みを再学習して、同様の異性を紹介しないようにする仕組みだ。

AIは常に学習を続けているので、既会員同士のマッチングも行われ、最近では成婚カップル誕生率が二十%を超えているのだとか。ちょっと検索してみたところによると、大手の結婚相談所の成婚率がだいたい十%らしいので、ちょうど倍になる計算だ。

（へえ……そんなにいいのか、これ……）

最先端AIマッチングシステムが、あなたを想い、助け、寄り添ってくれるベストパートナーをご紹介します。

ページに書かれたキヤッチコピーがただの宣伝文句だとわかっているくせに、どこか心惹ひかれていた自分がある。

登録するとき、どうして年収を逆サバしたり、役職を変えたり、適当な写真を送ったりした？ どんな男よりも赤坂透真がいいと言ってくれる女性に出会いたかったからではないのか？ あのとさから自分は、運命の出会いを待っていたのかもしれない。

透真はページを戻って、紹介された女性の写真をもう一度眺めてみた。ほかされた写真だが、痩せ型なのはわかる。髪色は黒。短いのか、結っているか……たぶん結っているのだろう。シンプルな白い服を着ている。飾り気のない女性だ。これが——いや、この女性が、A Iが導き出した自分のベストパートナー。

——H・Yさんに会ってみたいですか？
 (そりゃあ、まあ……)

こんなマッチングシステムでも利用しなければ、出会うこともない人だろう。フタリエコネットは同期が立ち上げた会社だ。怪しい出会い系のそれとは違うと頭ではわかっている。だが言葉にできない躊躇いがあるのも確かで——なのに、迂闊な指先がスマートフォン画面にポンと触れて、【はい】のボタンを押してしまったのだ。

「あ」

しまった！ と思ったときには既に画面が切り替わって、「H・Yさんにアポイントメールを送りました。返事があるまでしばらくお待ちください」と表示される。確認画面すら出ない。なんとというスピードだ。

「んん。ま、いっか……」

詰めた息を吐いて、椅子に身体を預けた。

【はい】のボタンを押してしまったからと言って、必ず会えるとは限らない。相手の意

思もある。透真がノリで登録したあのプロフィールを見て「会いたい」と思う女性は相当のレアだ。実際、登録したのは数年前のはずだが、今日までマッチングメールが来なかったのがいい証拠。少なくとも、父親が持ってきたお見合い写真のご令嬢達とは真逆のタイプの女性だろう。

(ベストパートナーねえ……。そんな女が本当にいるなら……)

会ってみたい——それは透真の純粹な興味だった。



『あなたにピッタリなお相手が見つかりました』

仕事が終わって電車で揺られているとき、華子はこんなタイトルのメールを受信した。送信元は、昨日、本会員登録が完了した結婚相談所、フタリエコネットだ。

「うほ！」

電車の中なのに、興奮したオランウータンのような声が出てしまい、隣に座っていた人にギョッとされる。華子は「スミマセン」と小さく頭を下げ、またスマートフォンの画面を見つめて鼻息を荒くした。

(ほ、本当に来ました。すごーい！ 思ったより早かったですねえ)

華子は誕生日に、フタリエコネットの店舗に向かったが、あの日はシステム説明と仮登録だけで終わってしまった。本登録に進むためには、様々な証明書が必要になる。それらの書類を揃えるのに二週間。それから審査に一週間。そして審査が通ったら、今度は自分のプロフィール作成と、感覚テストだ。

感覚テストは一般常識から道徳的思考、それからあらゆる人間の顔パターンを見せられて、その中から自分が「好ましい」と思ったものを選ぶ形式だった。受けた印象では、パーソナリティ理論に基づいた一種の性格分析だと思っ。潜在意識を探る感じだ。これを元にA Iがマッチングを行うのだろう。

写真の提出も必須で、この提出された写真をA Iが画像解析して、骨格から顔面偏差値採点を行うのだとか。科学はここまで進歩したのか。

華子が駅前にある証明写真機で撮った正味九百円の写真を提出すると、「本当にこちらでよろしいんですか!」と、担当者にも何度も確認されていた。

聞くところによると、写真館で見合い用の写真を撮影してもらい、それを登録する人が圧倒的に多いのだそう。九百円の証明写真——しかも、ひつつめに白無地のTシャツ、おまけにすっぱんの写真を提出してきた人間は今までひとりもいなかったと見える。だが華子にしてみれば、個人情報保護の観点からぼかしが入るとわかってる写真に、わざわざ気合いを入れる意味がわからない。どうせ見るのはA Iだけだ。A Iの

画像判定に影響するのは解像度のみで、どんな髪型だろうがメイクだろうが背景だろうが関係ない。あれやこれや言うのは人間の感性だ。

(どれどれ? どんな方をご紹介いただいたんでしょう?)

最先端のA Iがもたらす情報に、華子は興味津々だ。

華子は早速、本登録時にインストールしたフタリエコネット専用アプリを立ち上げた。

(なにに? イニシャルT・A氏。三十二歳。身長一八二センチ。体重七二キロ。会社員。職業カテゴリーはサービス業。年収三百万円。勤続十年。最終学歴、K大経済学部。趣味は仕事。——うん、超普通ですね!)

お相手のプロフィールを読み上げて、心の中で頷く。

華子が相手に求めるものはそう多くない。容姿や年収、学歴なんかは気にしないし、結婚しても、華子が研究を続けることに賛成してくればそれでいい。あとは、ついつい食べることを疎かにしてしまう華子の面倒を見てくれたら大変有り難い。

プロフィールを全部読むと、ページの最下部に、「T・Aさんに会ってみたいですか?」という問いが出てくる。せっかく結婚相談所に登録したのだ、【はい】以外の選択肢なんて存在しない。むしろ、【いいえ】を選択する意味がわからない。

華子が迷わず【はい】のボタンを押すと、ページが変わってカレンダーが表示される。

このページで、会うのに都合のよい日時を登録するらしい。

初めて会うときは、あまり気合の入った店だと緊張するので、カジュアルな店がいらいらしいが、恋愛慣れしていない登録者がそんな都合のいい店を知っているわけがないことも、我らが親愛なるフタリエコネットは織り込み済みだ。ふたりの勤務地や自宅から無理なく行くことができるレストランや喫茶店といった食事処を、AIが待ち合わせ場所としてリストアップし、予約代行までしてくれる。まさに至れり尽くせり、フタリエコネット模様である。

(登録以外は全部アプリ上で完結するなんてすごいですねえ)。じゃあ、会う日を決めないと……)

とりあえず今は自分が主体で進めている研究はないし、再再提出した次世代型ハイドロキノンαのプレゼン資料の結果も戻って来ていない。残業することもないと踏んだ華子は、平日日中以外は全てあいていると回答した。店も、リストアップされた全ての店舗にOKを出した。

(これだけ対面可能日に設定すれば、どこか一日くらい合うでしょう)

あとは相手の返事を待てばいい。相手に本当に会う意思があるのなら、日程もサクッと決まるだろう。そう予想した途端、アプリから通知が来て、お相手と対面する日が今週金曜の夜に決まった。場所は、職場の最寄り駅付近にあるレストランだ。徒歩十五分

ほどで着く距離である。

当日、待ち合わせ場所に着いたら、アプリにある到着ボタンを押すことで相手に連絡することができる仕様らしい。すれ違いを防ぐために当日になるとチャット機能も解禁される。ただし、連絡なしのドタキャンはフタリエコネットの本部に連絡が行き、一発退会処分となる。厳しいが、この厳しさがフタリエコネットの人気の秘密だ。

(仕事が速いですね、T・A氏。好感度高いです)。うちの商品開発部も見習えこの野郎です)

もう三週間も待たされている次世代型ハイドロキノンαの件と比較せずにはおれない。画面の向こう側で、T・A氏なる人物が自分に会おうと予定を入れてくれたのだと思うと、妙な高揚感を覚える。しかもこれはデートだ。確認のためにネットでデートの意味を調べてみると、日時や場所を定めて男女が会うこと、とある。ほら！ やっぱりデートだ！

人生初のデートの約束に、華子はホクホク顔で電車を降りた。



「山田女史、どうされました！ 今日(けふ)は珍しい格好(かっこう)ではありませぬか！」

出社した華子を出迎えたのは、同僚、阿久津の驚いた声だ。阿久津が突然大声を出す

ものだから、皆の視線が一気に華子に集中する。

珍しいと言っても、華子が着ているのは、就職活動に使っていた一般的な黒のリクルートスーツである。しかしこのリクルートスーツこそが、華子が持っている服の中で、最も値の張る文字通りの一張羅だ。

今日は金曜日。待ちに待ったT・A氏との対面日である。

初デートでTシャツにジーンズはさすがにラフすぎて失礼であろうと考えた華子は、熟考の末にリクルートスーツを引つ張り出してきたのだ。鞆も革製に変えたし、髪もゴムではなくバレッタでとめた。足元もパンプス。顔にはルースパウダーも叩いた。華子最大級のお洒落である。

自分のお洒落に気付けてもらえたのが、ちょっと照れくさい。仕事帰りに男と会うなんて、めちゃくちゃOLっぽいではないか。華子は上に羽織った白衣のポケットに両手を突っ込むと、「えへへ……」はにかんだ笑みを浮かべた。

「もしや、転職——」

「違います」

予想だにしていなかった阿久津からの質問に、サツと笑みを消して真顔で答える。華子がデートに行くなんて、他の研究員は考えもしないのだ。そもそも華子に転職の意思はない。なにせ華子には次世代型ハイドロキノンαがある。

（わたしの次世代型ハイドロキノンαちゃんを活かさないなど、会社会的な損失です。商品開発部もそれぐらいわかるでしょう。果報は寝て待てと言いますからね。わたしはじつくり待ちますよ）

華子はパソコンに接続された蛍光実体顕微鏡の前に座った。

華子が今手伝っているのは、島山所長が中心となって進めている、グラスファイバーを配合したマスカラの再開発だ。既に製品化されているのだが、商品開発部から「洗顏時に落ちにくいのをどうにか改良してほしい」とリニューアルを依頼された物である。

（だったらコーティング剤の成分を改良したほうが早いような気がしますけど……）

そんなことを考えながら、新開発のマスカラの上に、赤坂堂が発売しているメイク落としを各種垂らして、どの商品でどうなるかを顕微鏡で観察する。地味だが、現状の把握のためには大切な作業だ。

黙々と……ひたすら黙々と顕微鏡を覗く。そうしているとあつという間にランチャタイムだ。

「山田さん。お昼だよ。もう皆行ってるし、僕らも行こうか」

「あ、はい！」

所長の声に顔を上げる。いけない、いけない。ちゃんとご飯を食べなくては。

（では、メールチェックしてからご飯にしましょう）

こういうことをするから、ついつい食いっぱぐれる。それはわかっているけれども、華子はいつもの習慣でメールボックスを開いた。

『次世代型ハイドロキノンαについて』

そんな件名のメールが受信箱に入っている。受信時刻はついさっきだ。きつと商品開発部からの返事に違いない。

待ちに待った連絡を、華子のはやる気持ちを抑えきれずに開いた。

『提出いただきました次世代型ハイドロキノンαの詳細を拝見しました。その有効成分の効果効能は認めますが、開発方針から今回は採用見送りと致します』

「……採用見送りって……はいい!?」

淡泊たんぱくすぎるメールを前に、目を見開いて驚愕きょうがくする。ランチに行こうとしていた所長も足をとめてこちらを見ていた。吉報きっほうと信じて疑わなかった知らせなのに、見送りだなんて信じられない。商品開発部はしっかり検討し直してくれたのだろうか？ 検討し直してこの結果なのか。本当に？

華子はバツと電話を取ると、商品開発部の担当者に内線かけた。

「もしもし！ 研究所の山田です。次世代型ハイドロキノンαちゃんの件で確認したいことがあるのですが、担当者さんは——あ、はい……はい……ではお戻りになったら——え、そうなんですか？ はい……わかりました……では後日改めて……」

電話を切ってドサツと椅子に崩れ落ちる。近付いてきた所長が、おずおずと聞いてきた。

「開発部はなんて？」

「採用見送りだそうです。担当者に電話したのですが、今は昼休憩だと。折り返しの連絡を頼もうとしたんですが、今日は午後から会議があるから来週にしてほしいと言われて……」

「あー……それはあ……」

逃げられた——それぐらい、華子にもわかる。おそらく来週電話しても担当者は出ない。直接出向いても離席りせきしているか、他の用事があるからと邪険じかかんにされてしまうだろう。採用できない理由を教えてもらえれば改良の余地もあるのに、商品開発部は華子を相手にする気なんてまるでないのだ。

「よくあること。よくあること！ 僕らの仕事は会社の手数を増やすこと。増やした手数をいつ、なにで、どう使うかを決めるのは商品開発部。それぞれの領分りょうぶんがあるんだから」
察さつした所長なだが宥めるように、優しく論ろんしてくれる。

「……………はい」

そう返事をするものの、悔しさとやり切れなさが胸に込み上げてきた。行き場をなくした感情が、身体の中に澱おりのように蓄積するのだ。

「所長、お昼に行ってください。わたしはちょっと食欲がなくなっちゃったので……」

華子がそう言うと、所長は少し眉を下げた。
 「そうかい？　じゃあ、そうさせてもらうけど、あまり思い詰めないことだよ」
 ぎこちなく微笑んで頷いてみせる。

所長が食事に出て、研究所にひとりになった華子は、握りしめた拳を小さく机に叩きつけた。

（有効打がありながら使わないだなんて、怠慢以外のなにものでもないですっ！　仕事しやがれってんですよ！　おたんこなす！　だからいつまで経っても赤坂堂は二位なんですよ！）

腐るつもりはないが腹は立つ。真剣に取り組んでいたから尚更だ。

華子は胸中でひとしきり毒づいて、椅子の背凭れに身体を預けた。そして、天井を仰ぎながらそっと目を閉じる。いつか所長と阿久津に言われた言葉を思い出していた。

これは洗札なのだと。仕方のないことなのだと。諦めるしかないのだと……

だが諦めるなんてことは、華子のポリシーに反する！

（ふんだ！　誰が諦めるもんですか。見てるがいいです。なにがなんでも商品化してみせます。商品開発部め、次世代型ハイドロキノンαちゃんの前にひれ伏すがいいです!!）

逆境こそチャンスなり。具体的なアイデアはまだないが、せつかく生み出した最高

傑作をお蔵入りになどしてたまるものか。華子は鼻息を荒くすると、机の引き出しにストックしていたブドウ糖入りゼリー飲料を取り出して、チューツと一気飲みした。



（や、やばいです！　ピンチです！　初デートなのに遅刻です！）

華子はスマートフォン片手に全力疾走しながら、待ち合わせのレストランへと向かった。

現在時刻は十八時五十九分二十秒。T・A氏との待ち合わせ時間の十九時まであと四十秒しかない。次世代型ハイドロキノンαをどうやって救うかを考えることに夢中になって、会社を出たのが定時を四十五分も過ぎてからだったのだ。十五分で着く距離だと思って油断しすぎた。本当はもっと早く会社を出るつもりだったのに。

アプリの通知によると、T・A氏はもう待ち合わせの場所に着いている。しかも約束時刻の十分前だ。氏には、本日解禁されたチャット機能で、「やや遅れるかもしれない」と念のために断りを入れてはいるものの、だからといってのんびりはしてられない。

（パ、パンプス……走りにくい……）

普段穿き慣れたジーンズとスニーカーが恋しい。約束の時刻を一分過ぎて、汗を垂らしながら待ち合わせのレストラン前に到着した。辺りを見回すと、入り口から少し離れた道路脇に、スーツ姿の男の人がひとり立っているのが目に入る。道行く人はたくさんいるが、立ち止まっている人は他にいないし、おそらくあの人が件のT・A氏だろう。そう当たりを付けた華子は思い切って近付いた。「あ、あの……はあはあ……フタ、フタリエコネ、ツトの……はあはあ……えつと……」呼吸はめちやくちや、汗はダラダラ、単語はカミカミだ。この人がT・A氏じゃなかったらどうしようという不安と、待たせてしまった申し訳なさがごちゃ混ぜだ。かなりいっぱいいっぱい、華子は今自分がどんな状態で、この人にどんなふうに見られているかなんてまったく考えもしなかった。

「……………君が、H・Y、さん？」

たっぷりと間を置いた彼の視線が、華子の頭の天辺からつま先までを移動する。どうやら人違いではなかったようだ。身長一八二センチのプロファイルの通り、背が高い。スーツ姿のせいかもしれないが、がっちりしたその体格は、研究所で見慣れた男性同僚らとはまるで違う。

華子は手にしていたスマートフォンからフタリエコネットの専用アプリを開いて、証明するように自分のプロフィールページを見せた。

「は、はい！ 山田華子と申します！ 初めまして！」

意識して元気な声を出す。ついでにニコツと笑うと、T・A氏の口角がピクツと引き撃ったように上がった。

「……………どうも……………」

相手は言葉少なだ。もしかして、おとなしい人なんだろうか。だとすると、結婚相談所を利用するのも納得だが。

（それとも怒ってるんでしょうか？ 一分二十秒くらい遅れてしまいましたし）
「あの、すみません。お待たせしてしまって……………」

ぺこりと頭を下げる。氏は表情ひとつ変えずに、「いえ」と言った。

「仕事は大丈夫？」

「ええ、それは、はい。大丈夫です」

おそらく氏は、華子の仕事が長引いて時間に遅れたのだと思ったのだろう。そんな人に、仕事自体は定時で終わっていたのだとはとても言えない。眼鏡の奥で、微妙に視線が泳いでしまう。

「……………じゃあ、入ろうか」

「そ、そうですね」

T・A氏が木製のドアを引くと、カランカランとドアベルの音がする。「どうぞ」と